交流

〈大会発表要旨〉

◆宮尾正樹　海子から余秀華へ――（極）私的体験的あるいは「揺揺晃晃」的詩論

本発表は最終講義的性格も帯びるということで、これまでの研究・教育実践を簡単に振り返った後、この数年学生たちと近現代詩を読んできて感じた、体験的読解の可能性について述べてみた。主として取り上げたのは、二〇一四年ごろからインターネットを通じて社会現象的な人気を博した、「穿过大半个中国去睡你」などの作品で知られる余秀華（一九七六～）の作品であり、朦朧詩の掉尾を飾る早熟夭折の詩人海子（一九六四～一九八九）を参照した。余秀華は自らのアイデンティティを「女、農民、詩人」、しかもこの順序で、と規定するが、本発表においては、脳性麻痺の障害を持つ身体と精神に見えるだろう物について、彼女を語る際によく使われ、彼女自身も詩集のタイトルに使用する「揺揺晃晃」をキーワードにして、それが自分自身についての表現であると同時に、彼女の目に映る世界のあり方でもあることを指摘した。身体の自由が効かなくなった読者（発表者）はそのような見え方に共感／誤読して、「私」もゆらゆら揺れ、世界もゆらゆら揺れ、すべてがゆらゆら揺れていると見えることに救いのようなものを感ずると述べた。蛇足として、近現代詩を渉猟する授業において、立ち上る暗闇に包まれて自殺という方法を選択した海子ではなく、選択の余地なく与えられた身体で、選択の余地なく生きることを表明する余秀華に、最後にたどり着いたことに喜びを感じていると述べた。

〈例会発表要旨〉

◆富嘉吟　『川文粋』について

『文苑英華』は『文選』の後を継ぐべく、北宋初年に編纂された千巻の規模を有する一大総集である。その校記及び『弁証』は南宋の編纂であるが、当時まだ存在していた刊本や写本を用いており、様々な異文や散佚書をここに見ることができる。本発表は、『文苑英華』校記に収録されている『川文粋』という散佚書について考察を行うものである。

考察によって、『川文粋』は眉山の成午が『唐文粋』をもとに、収録作者と収録作品を増やして編纂する『唐三百家名賢文粋』の別称であり、校記よりやや早く成立したものである。劉克荘の序文がついているが、これはおそらく書估が売上を伸ばすために偽造したものである。『川文粋』は南宋以降に早く散佚したと考えられるが、『文苑英華』校記によってその一部を復元することができる。

『川文粋』の成立は、四川地域の書籍印刷業の発達を背景として挙げられる。特に蜀刻『唐六十家集』を代表として、数多くの唐人詩文集が四川辺りに伝えていることは、『川文粋』の編纂を支えるもっとも大事な条件と言える。

◆趙美子　曹植の遊仙詩について

「遊仙詩」とは、神仙世界を描く詩のジャンルである。曹植の遊仙詩について、先行研究ではほぼ俗世を離れた趣を表すより、神仙世界への憧れを描くこと

で現実世界への不満などを表すというふうに認識している。しかし、神仙に対する曹植の態度、また具体的な詩の制作時期について、各研究の意見は一致していない。本発表は先行研究を踏まえてこれらの問題を検討することを通じて、以下の二つの結論を出している。一つめは、遊仙詩を含む各時期の作品を比べてみると、時と共に神仙に対する曹植の態度には「信じない」から「憧れる」への変化が見られる。二つめは、遊仙詩に黄帝の死に関わる「鼎湖」の典故を用いることから、亡き文帝曹丕への偲びが読み取られる。従って、曹植は曹丕の死をきっかけに、神仙世界に憧れを抱くようになったのではないかと考えられる。

◆泰田利栄子　周興嗣研究―博士論文に向けての進捗報告―　梁の文人、周興嗣は、梁武帝の命で『千字文』を撰述したことで広く知られるが、その人物研究については未だ充分であるとは言えない。そこで、周興嗣に関する先行研究と①史書②贈答詩③『尚書故実』等の史料を整理し、それらを読み解くことで人物研究の歩を進めたいと考える。まず周興嗣研究の対象となる文献を確認した上で、①史書に見える周興嗣像②呉均との贈答詩のやり取りに見える周興嗣像③『尚書故実』等の逸話に見える周興嗣像を整理する。①からは、周興嗣が『千字文』を撰述したのは五〇八年十月以降から五一〇年に新安郡に転出するまでで、『千字文』以前に持病を患っていたことが分かる。②からは、始めは親密だったが、最終的に呉均との関係に歪みが生じたことや、若き日の周興嗣の姿が伺える。③周興嗣の逸話・記録を三種類に分け、各類型の成立背景について考察を加え、その人物像を検討する。例会では、以上のように、博士論文の進捗状況について報告を行った。

◆王芸嬪　非量詞用法の〝个〟と〝一〟の共起に関する一考察――〝个＋ＮＰ〟形式を中心に　本発表では、中国語における汎用量詞〝个ｇｅ〟の非計数機能を考察し、その〝个ｇｅ〟と数詞〝一〟との共起条件を分析するものである。〝个ｇｅ〟に関する研究は多くみられるが、その中で、非計数で用いられる〝个ｇｅ〟に関する考察は新しい視点として、ここ数年で注目を集めるものである。本発表は特に、非計数で用いられる〝个ｇｅ〟構文のうち、「動詞＋〝个ｇｅ〟＋ＮＰ」構文及び「人称代名詞＋〝个ｇｅ〟＋ＮＰ」構文に注目し、実例分析を行った。具体的な内容は以下の通りである。

まず、〝个ｇｅ〟の非計数機能に関する先行研究を簡単にまとめたうえで、問題を提起した。

次に、先行研究で指摘されている〝个ｇｅ〟の非計数機能を再検討したうえで、非計数機能を表す〝个ｇｅ〟の定義を明確にした。

さらに、上述の二つの構文をそれぞれ考察し、文に含まれる含意関係と数詞〝一〟の共起可否の関係について分析を行った。

◆李夢雨　魔術的リアリズムから異なる道へ―閻連科の「神実主義」　閻連科（えんれんか）は、莫言の次にノーベル文学賞の有力候補として、ここ数年注目されている。しかし、その一方、彼は「禁

書作家」、「最も争議の多い作家」とも言われている。中国の評論界では常に彼を中国の魔術的リアリズム作家と評価しているが、彼はそれを否定し、現在の作品を「神実主義」と名付けて提唱した。

近年、閻連科と魔術的リアリズムとの関連について多くの研究者が検証していた。しかし、彼の「神実主義」と「魔術的リアリズム」の異同については、ほとんどの研究者が両者の「異」に注目し、両者の「同」についてあまり言及していない状況である。

本研究は、閻連科の作品に現れる「神実主義」の形成経緯を究明し、また具体のテキストを分析し、「神実主義」のイメージ表現とガルシア＝マルケスの作品のイメージ表現を比較する。その結果に基づき、「神実主義」と魔術的リアリズムの複雑な関係を明らかにすることを目的とする。

〈博士論文要旨〉

◆石井洋美　葉霊鳳作品の比較文学的研究―フロイト精神分析と西洋文学作品の影響を中心に―　本研究は葉霊鳳が一九二四年から一九三八年までの約十五年間に書いた小説を対象とし、膨大な量の読書を通じて彼が受けた西洋の学問、思潮、文学作品からの影響が作品の中にどのように表れているのかを見ようとするものである。

内容は四章から成る。第一章ではフロイト精神分析の作品への応用のしかたを見た。第二章では夢を描いた作品の一つである「鳩緑媚」を取り上げ、アンドレ・ジッドの『贋金つくり』などから示唆されたと考えられるミザナビームという技法の応用のしかたと効果を見るとともに、主人公の夢を通じて吐露された葉自身の願望について論じた。第三章では葉が描いた男女のありようを通して、葉の女性観が、彼が属するとされる中国新感覚派の劉吶鷗や穆時英の女性観とは異なることを述べた。そして、その違いの原因の一つとして『椿姫』から葉が受けた影響があることを指摘した。第四章では「麗麗斯」とアナトール・フランスの「リリトの娘」のテクスト及び内容を比較し、この作品が「リリトの娘」を下敷きにして一九三〇年代の上海に生きる女性を描いたものであることを指摘した。

◆王芸嬛　中国語における因果関係を表す複文に関する研究～説明因果文、反事実仮定文及び疑念を表す推論文を中心に～　本研究は、中国語における因果関係を表す三種類の複文を取り上げ、情報構造及び情報構造の変異について論じるものである。取り上げた三種類の複文とは、説明因果複文〝因为〟文、推論因果複文〝既然〟文及び仮定を表す〝如果〟文である。

第1章で中国の複文に関する先行研究と、分析に使う焦点や前提の概念をまとめた。第2章では、〝因为〟文を取り上げ、原因節が焦点化される時には、話し手が原因節を対比的焦点として認識していることを明らかにした。第3章では、反事実を表す〝如果〟文について考察し、否定による前提判断テストにより、仮定節の内容が偽であることが前提である（i）類、仮定節の内容が偽であることが焦点である（ii）類、主節の内容が焦点となる（iii）類に分かれ、この情報構

造の違いが、原因節の焦点化された〝因為〟文との交換可能性を決定することを主張した。第4章では、疑念を表す〝既然〟文を取り上げ、疑念を表さない一般〝既然〟文とは、前提と焦点の位置が異なることを判明した。

◆胡潁芝　漱石の「向う側」から晩年の「則天去私」へ―東洋思想との関わりを中心に　本論文は、近代の代表的な作家夏目漱石（一八六七～一九一六）を研究対象にし、「向う側」という、漱石の現実逃避の傾向に密接するモチーフを手がかりとして、その文学と思想における東洋思想、とりわけ道家思想の影響を論じており、晩年の「則天去私」思想の形成について究明した。とくに、漱石の「則天去私」は晩年に突然現れた考え方ではなく、若いときから持っている、「万化と冥合」する絶対の道への憧れから発展されたものであると指摘した。しかも、漱石の東洋思想の受容は、従来の研究では、単純に「漢学素養」という角度から考察されていると思われる。もし明治時代の「東洋哲学」の形成という背景も考慮すれば、漱石の東洋哲学としての老荘思想受容を考察する作業は、漱石研究における重要な課題だけでなく、明治・大正時代の老荘思想および東洋哲学の受容史を整理するために、その前置き作業に相当すると思われ、これこそ本研究の意義である。

◆迫田博子　葉石濤作品における文学観の実践　本論文は、台湾戦後第一世代作家・葉石濤の小説作品を対象とし、作家の標榜する文学観に着目しつつ、その文学観をどのように創作に実践、反映しているかを考察したものである。葉の文学観はフランスの哲学者のイポリット・テーヌから影響を受けたものとされ、文学作品を生み出す三大要素とは「種族・風土・歴史」と説く。本論では、まず葉におけるテーヌ理論の受容のあり方を明らかにした上で、取りあげた各テクスト――『台湾男子簡阿淘』、「獄中記」、『西拉雅末裔潘銀花』、「晴天和陰天」にみる三要素の実践手法について論じた。例えば「種族」では、異なるエスニック・グループ間の差異を相対的に捉える描き方が際立つ、などの特色を有することを指摘した。葉は、作品の素材の多くを台湾固有の「種族・風土・歴史」に求め、台湾社会の諸事象や人々の生のありようを叙述してきたが、彼が自らの文学観で意識し続けてきた視座をいかにテクスト化したかを闡明した。

◆鈴木基子　張愛玲『小団円』にみる恋愛と結婚――伝記と小説との比較を通して――　本学位論文は張愛玲の自伝的小説『小団円』にみられる恋愛・結婚における愛の観念を通して、張愛玲の実像を明確に理解すること、及び作品が読者に示唆した事項を考察の目標とした。

張愛玲・叔母張茂淵・母黄逸梵の事実と推定される伝記（事象）と、『小団円』に登場する盛九莉・叔母盛楚娣・母卞蕊秋との類似点と相違点を比較検討する方法をとった。

ひとつ目の目的である愛の観念は「目的がない愛こそ本物」であり、報われない事を厭わない純愛の形である。伝記と小説の比較の結果、愛の観念は共通したが、小説は伝記よりも刺激的で事実を過

激に脚色しており、ヒロインが張愛玲自身と誤解される臨場感がある。

ふたつ目の目的の考察結果は四点ある。一、愛の形は愛情至上主義。二、宗族家父長制・一夫多妻多妾制への反発心。三、女性の教育と自立の重要性。四、血の継承への恐怖と嫌悪感からくる子孫継承の否定観。いずれも二十世紀初頭から半ばにかけての激動の時代背景の中で、個人・社会の人間関係にも大きな意識の変化があることを反映している。

〈修士論文要旨〉

◆呉優美子　岑参詩の送別歌行について――その語りから導かれるもの――

本論文では、岑参の五篇の送別歌行（①「梁園歌送河南王説判官」、②「走馬川行奉送出師西征」、③「函谷關歌送劉評事使關西」、④「胡笳歌送顔眞卿使赴河隴」、⑤「秦箏歌送外甥蕭正歸京」）にみえる人称代名詞「君」（あるいは「汝」）の意味について考察する。これら五首はみな、作品の冒頭に「君不見」・「君不聞」・「汝不聞」という表現がみえるが、そのうち③④⑤には末尾に、詩題に明記されている見送る相手を指し示す「君」や「汝」の語が出現する。

本論文は、作品冒頭部の「君不見」とは、従来の無数の作品の創作と受容のなかで受け継がれてきた感興（たとえば時間の推移に対する慨嘆など）を喚起するものであり、「君不見」における「君」は、その感興を共有する共同体の成員すべてに対する呼びかけであると考える。また呼びかける主体も現実の場における個別的主体としての作者岑参ではなく、あくまでも岑参その人からは切り離された抽象的な話者（語り手のこと。また語り手とは、作者とは異なる存在であろうとする性質を備える話者を示すこととする）であると考える。

末尾の「君」は、冒頭の「君不見（不聞）」の発話者を語り手から岑参へと転換する。共同体の成員共通の空間における黒子として存在していた語り手は、詩の末尾において、「君不見（不聞）」と同様の呼称「君」で見送る相手を呼ぶことにより、作品の冒頭に遡って現実における自身個人の姿を重ねて写し込む。

「君不見（不聞）」に、個としての作者岑参を時間差で登場させることは、すべての者に共通する空間と、現実において岑参が向かい合っている場との交わりを仄めかすことになる。また、異なる空間の接続と一体化が、作者に導かれ手配された、作者に従属するものであることも示される。

◆王其涵　中国語における疑問詞の非疑問用法について　本稿では、研究対象である疑問詞の先行研究を踏まえ、疑問詞の分類についての問題点を検討した後で、統一的な呼び名を決め、疑問詞の定義を提出した。形式意味論の観点によると、疑問詞を自由変項として扱い、その振る舞いが何を表すかはそれを束縛する演算子に依存する。また、話者は何らかの理由で具体的な物事が言えない場合が存在する。語用論の観点から見ると、これは疑問詞の代名詞用法である。よって、中国語における疑問詞の非疑問用法を全称読み、存在読みと代名詞読みの三つに分けた。

まず、全称読みについて、単文と無条

件複文のツリーモデルを提案し、その適用性を証明した。次に、存在読みについて、三つの文型ごとに、対応するツリーモデル或いは論理式を提出し、それぞれの制限条件を論じ、そのうち、否定の程度を緩和するという特殊用法も考察した。そして、特殊文型について、中国語のロバ文と反語文を討議した。最後に、代名詞読みが現れることができる二種類の場合をまとめた。

◆何慧琳　〝怎么……呢〟及び〝哪儿……呢〟からみる反語文の談話機能

本研究では、現代中国語における疑問詞疑問文形式の反語文の一部である〝怎么〟、〝哪儿〟類反語文を研究対象とする。最初に、先行研究を踏まえ、反語文を形式と含意が対立し、問いかけではない疑似疑問文であると定義した。そして、疑問詞反語文のストレスについて議論してみた。次に、疑問項が成立する語用論的に妥当な文脈体系を批判し、修正案を提案した。修正案では、反語文の成立条件として、疑問項の疑問対象の集合Yを設定した上で、話し手がYの全ての成員を調べた結果、Yにおいて真である命題があるかどうか、あればどれが真であるかがわかったと述べた。真である命題がない場合、反語文は表の形式と異なる含意を表し、真である命題がある場合、反語文はその命題を否定することにより含意を表す。最後に、反語文の談話機能として、ポライトネスを表すことにより、結果的に会話を円滑にすすめることと、インポライトネスを表すことにより、結果的に会話を不快に終わらせることであると主張した。

◆馬翊璇　厳歌苓小説における研究――フェミニズム物語論の視点より――

本論では、厳歌苓小説を対象に、物語構造における語りの権威とジェンダー意識、および女性身分と女性意識がどのように物語に機能しているのかについて考察する。本研究では、厳歌苓の小説について、フェミニズム視点からのそれの作品についての研究結果と、フェミニズム物語論の視点からさまざまな先行研究で研究された問題の上に厳歌苓小説の特徴を調査し、中国文学におけるフェミニズム物語論の研究テキストとしてのその価値を証明することを目的とする。

また、本研究の研究方法について、基本的にはロビン・R・ウォーホルが提供する理論を用いて研究を行う。つまり、本研究の目的は物語論の方法により物語言説層におけるジェンダー差とジェンダー特徴を抽出した上で、それらの差異と特徴を歴史的、文化的、イデオロギーなどのコンテクストと連結して分析を行い、厳歌苓小説における女性言説の特徴と男性修辞との繋がりを明らかにすることである。

◆林家妤　非母語訳者の特徴について――林文月と蕭蕭が翻訳した「たけくらべ」を中心に――

一九八九年、梁啓超を主幹とした『清議報』が創刊されて以来、日本の書籍を中国語に翻訳することが徐々に増えていった。一般的に、母語から非母語へと翻訳されることは少ないため、日本人の蕭蕭と上海共同租界に生まれた林文月とは特別な存在である。二人は日本語を第一言語としながらも、日本文学を中国語に翻訳し、共に樋口一

葉の作品『たけくらべ』を選んだが、中国語母語話者から見ると不自然な表現がある。

まずは、非中国語母語話者の定義と訳者の背景を紹介する。そして、二人の訳本に基づいて、非中国語母語話者である訳者の翻訳の特徴を分析する。訳本の助詞、単語、主語と文章の流れや区切りなどの不自然な表現を分析し、訳者の生い立ちの背景と翻訳の特徴の関連性とを究明する。結論では、代名詞と主語の順序は、地域や時代に関係なく、不自然な文法であるため、翻訳特徴の一つであると推測される。また、特徴は異なるが、両者の訳文の区切りにも不自然な表現がある。これも、翻訳特徴の一つであると考える。